

美術館ニユース 群馬の森

no. 187
2022 1/1

群馬県立近代美術館は、現在、工事休館中です！

前号でお伝えしたとおり、当館では、現在、空調設備更新工事と特定天井改修工事が行われています。12月16日から全館休館となり、いよいよ本格的に工事が始まります。

空調設備更新工事では、先行して、屋外での工事が進められてきました。美術館本館建物裏に新たな熱源機器置き場が造設されています[写真 1]。なお、工事に伴い、当館および隣接する県立歴史博物館の裏（北側）を通る群馬の森公園の園路は通行止めとなっています。公園を利用される方にはご不便をおかけしますが、ご協力をお願いします。

秋の企画展「関東南画のゆくえ 江戸と上毛を彩る画人たち」とコレクション展示が11月7日ですべて終了し、その後作品撤収、移動を終えて、18日に本館熱源機および各展示室、収蔵庫の空調を停止しました。その後、本館機械室内の熱源機器やポンプ類の撤去工事が進められています[写真 2]。

今回は本館空調設備の更新のため、工事中、本館にある展示室や収蔵庫で作品を保管することはできません。幸い当館では、増築された新収蔵庫棟、現代美術棟それぞれに熱源があり、空調の系統は独立しています。本館にある収蔵庫（旧収蔵庫と呼んでいます）内の作品は、工事中も空調運転ができるそちらのスペースに移動しました。工事終了後に、元の収蔵庫に戻すことになります。

特定天井改修工事においては、休館に入り、まずはホール、中央階段での足場の組み立てが始まります。面積が広く天井も高いため、足場を組むだけでも1か月半ほどかかる見込みです。

ところで今回の改修工事は、「県有施設長寿命化」の一環として行われています。

県が所有する建物は、庁舎だけでなく学校や美術館・博物館まで含めて多数あり、用途も様々です。それらの建物を日常的に点検し、計画的に修繕・改修することで寿命を延ばし、有効に活用していくというのが「長寿命化」の考え方です。

長寿命化工事には、防水・外壁等の建築改修工事や、電気・空調・給排水等の設備更新工事があります。当館ではこれまでたびたび増改築を行ってきましたので、今後も、建物や設備が順次更新時期を迎えることになります。複数の大規模な工事が必要となる中、できるだけ工事を集約して実施することで休館期間を最小限に抑え、美術館活動の維持に努めていきます。

工事については、次号（2022年4月1日号）でも報告させていただく予定です。工事が終了し、展示を再開するのは新年度に入ってからとなりますが、次号では来年度の展示計画についてもお知らせします。



[写真 1] 新しく本館裏に造設された熱源機器置き場の様子。
左は現代美術棟の建物（2021年11月26日撮影）



[写真 2] 本館機械室内の様子。奥に見えるのが熱源機器（冷温水発生器）。手前のポンプ類を含め、すべて撤去・新設される（2021年11月23日撮影）

企画展示「関東南画のゆくえ 江戸と上毛を彩る画人たち」 関連事業報告

太田佳鈴

展覧会に関連した、以下の多彩な事業を開催いたしました。

◆記念講演会「意外に愉快的な関東南画―饒舌館長口演す―」

講 師：河野元昭氏（静嘉堂文庫美術館館長）

実施日：9月25日〔土〕 14:00-16:00

会 場：講堂

参加者：46名

日本近世絵画史研究の大家である河野氏を迎え、関東南画を読み解く記念講演会を開催しました。「饒舌館長」のブログでも知られる河野氏の軽妙な語り口により、マイベストテンとして具体的な作品10点とそれにまつわる漢詩やエピソード等が紹介され、漢詩や中国文化を基礎とした難解な南画の世界を、より身近に、魅力的にお話しいただきました。



河野元昭氏



会場風景

◆ミュージアム・レクチャー

①「北関東における関東南画の広がり」と展開」

講 師：橋本慎司氏（栃木県立美術館技幹兼学芸課長）、太田佳鈴（当館学芸員）

*藤和博氏（元茨城県立歴史館首席研究員）はご病気のため急遽欠席されました。

実施日：10月3日〔日〕 13:30-16:00

会 場：講堂

参加者：39名

関東南画の展覧会を手がけた学芸員という立場から、主に栃木については橋本氏が、主に群馬については太田が、その広がりや展開について講演しました。橋本氏には昨年度、企画・開催された「栃木における南画の潮流 一文晁から魯牛まで」展での成果をふまえ、近世から近代まで広く画家、作品を紹介いただきました。県それぞれの視点だけでなく、北関東という文化圏での広がりにも目を向けたものとなりました。



橋本慎司氏



会場風景

②「崑山と椿山、地方の書画文化とのかかわり」

講 師：増山禎之氏（田原市博物館館長）

実施日：10月30日〔土〕 14:00-16:00

会 場：講堂

参加者：39名

妹が桐生の岩本家に嫁いだことから群馬にも縁のある渡辺崑山ですが、田原藩（現在の愛知県田原市）は崑山の地元、縁の地であり、増山氏は長年、市の学芸員として活躍され、崑山やその弟子の椿椿山の研究をされてきました。そうした成果から作品等にみえる崑椿系画家の動きと関東一円の人々とのつながりを紹介され、人々の交遊についてお話しいただきました。



増山禎之氏



会場風景

このほか、学芸員による作品解説会（9月20日〔月・祝〕、10月6日〔水〕、10月27日〔水〕、11月3日〔水・祝〕 各日とも14:00-15:00）を講演会形式で講堂にて行ないました。

いずれも事前申込制等によって少人数、距離をとるといった、新型コロナウイルス感染防止対策を講じ、無事開催することができました。多くの方にご参加、ご清聴いただき、誠にありがとうございました。

T o p i c s

M u s e u m | N e w s

湯浅一郎とカフェパウリスタ

定松晶子

当館の所蔵する湯浅一郎資料の中には、10×15 cm程度の小型のスケッチ帳がある。鉛筆や水彩絵具のスケッチもあれば、文字も書き込まれ、湯浅はこれを兼メモ帳として使っていたようだ。このスケッチ帳の一冊を見ていたところ、当館所蔵の油彩画《境内》(図1)の元と思われるスケッチ(図2)を見つけた。《境内》は平成21年度に寄贈された作品で、サインや年記がなく、作品名も制作年も分からないため、とりあえず《境内》と名づけられた。このスケッチは同時期に寺社や山を描いた一連の写生の一枚で、他の頁に「愛宕山」「衣笠山」「北野社」の書き込みがあることから、京都の北野天満宮を描いたものと思われる。

スケッチした年を示す情報がないかと頁を繰ると、数字と文字の入り交じった書きつけが数頁にわたって現れた。「電車」「朝めし」などの横に50や13といった数字が並び、どうやら湯浅が京都で使ったお金を記録した日記のようだ。日によってはどこで写生し、誰に会ったということも書かれている。読んでいくと、その中に頻りに現れる横文字とカタカナに気がついた。「Paulista 80」「山下(山下新太郎と思われる)トパウリスタ八五」「パウリスタニテ食一、一五」と記されたそれは、大正期に大繁盛し、日本中に支店を開いたカフェパウリスタのことであろう。

カフェパウリスタは、日本人のブラジルへの移民事業を行った水野龍(1859-1951)が、サンパウロ州政府から無償供与されたコーヒー豆で、本格ブラジルコーヒーを日本人に飲ませようと開いたカフェである。明治44年に東京、大阪、名古屋、横浜で開業すると、文筆家や画家など先鋭的な人々に支持され(註1)、大正に入ると全国に20店舗以上の支店を持つまでに拡大した。京都では新京極と四条に店舗のあった記録がある(註2)。当時画期的だった一杯5銭のコーヒーばかりでなく、西洋料理と洋菓子が供され、湯浅のように食事目的の人が多かった。メニューにはカレーライス、ビフカツ、ポークチャップ、ロールキャベツ、ジャーマンビーフ(ハンバーグ)や、そして今で言うスイーツではドーナツ、アップルパイ、ショートケーキ、プリン、焼きリンゴ等々があった。湯浅先生、何を食べたか書き残してくれなかったのは残念である。

大正12年9月の関東大震災により、カフェパウリスタは大きな打撃を受け、さらに同年にブラジルからのコーヒー豆無償供与の期限を迎え、経営が難しくなったことから、大正12年から13年にかけて全国の支店を売却、譲渡して喫茶店経営から手を引く。ということは湯浅のスケッチ帳の日記はそれ以前のものである可能性が高い。また、この日記には「今朝行枝ヨリ通信アリ」という記載が見られる。「行枝」とは湯浅の三番目の妻、ゆくゑ夫人のことで、二人は大正9年に結婚していることから、この日記の年は大正9(1920)年から大正12(1923)年頃までに絞られる。とはいえ、日記とスケッチと油彩、それぞれの時間的関係がはっきりしないので、相変わらず《境内》の制作年は不詳のままなのである。

参考文献：長谷川泰三『日本で最初の喫茶店「ブラジル移民の父」がはじめたカフェパウリスタ物語』文園社 2008年
斎藤光『幻の「カフェ」時代』淡交社 2020年



図1 湯浅一郎《境内》制作年不詳
油彩・カンヴァス
当館蔵(湯浅新六氏寄贈)

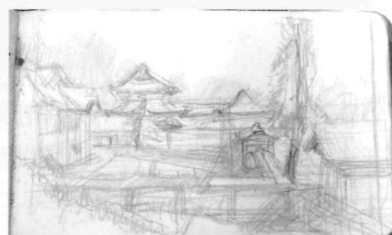


図2 《境内》スケッチ 当館蔵

註1) カフェパウリスタを利用した記録がある画家や彫刻家には、岸田劉生、黒田清輝、藤田嗣治、高村光太郎などが挙げられる。また同カフェの室内を描いた長谷川利行の油彩画が2点現存(うち1点は東京国立近代美術館蔵)する。

註2) 京都の第一号店は明治45(大正元)年頃京都市役所に近い寺町通に開店したらしい。新京極支店は、大正9年の開業。下京区四条の支店の存在は奥山儀八郎『珈琲遍歴』による。

友の会だより

ミュージアムショップでは休館中も当館所蔵品目録や過去に開催された展覧会図録のほか、一部ショップ商品も通信販売にてお買い求めいただけるようになりました(別途送料がかかります)。

取り扱い図録・商品は美術館ホームページより、

トップページ→利用案内→ショップ→ショップ主要商品→販売用図録リストまたは通販用グッズリスト

にてご覧ください。なお、ファックスにてリストの送信も承ります。

お問い合わせは下記の電話番号にて、ミュージアムショップ担当 までご連絡ください。



展覧会図録

Museum : Shop

通販グッズ



1 920年代後半のパリ社交界で肖像画家として人気を博したローランサンは、数少ない女性画家としてその地位を確立していく。その功績を讃えられレジオンドヌール勲章を受勲した1937年、54歳の時に制作された本作品では、ブルーとイエローの衣装と真珠の装飾を纏った女性が描かれる。傍らに寄り添うエアデルテリアはローランサンの愛犬ディナかもしれない。第一次世界大戦で伝令犬として活躍し、戦後は飼い犬として流行したエアデルテリアが当時の世相を反映しているのに対して、女性の装いはきわめて懐古趣味的である。片方の胸をはだけて見せるポーズは、女神の扮装で描かれたロココ時代の貴婦人たちを思い起こさせ、さらに時代を遡ればイタリア・ルネサンスの影響の下にフォンテーヌブロー派の画家が王の愛妾を描くときにもちいたポーズでもある。

少女時代から、神話やおとぎ話、そして典雅な王の恋人たちの逸話を愛し、画業の初期からしばしば物語的な主題を描いてきたローランサンは、名声が高まっていく1920年代後半以降、肖像画制作の傍ら、ますます幻想的な女性像に力を入れていく。恋人だったといわれる家政婦のスザンヌ・モローがインスピレーションの源となったためか、初期のローランサンが好んで描いた、とがった顎と切れ長の目をしたモダンガールは、スザンヌと同じ卵形の輪郭と丸い瞳を持つあどけない顔立ちの女性たちへと変貌を遂げる。彼女たちは中東のオダリスク(後宮の女性たち)のようなターバンやギリシャ神話のミューズがつける月桂樹の葉で頭を飾り、花や楽器とともに描かれた。

かつて、詩人ジャン・コクトーはローランサンについて「フォーヴとキュビストのあいだで小さな雌鹿が罠にかかった」*と書いたが、彼女の後期の作品はいずれの派にも属さない「マリー・ローランサン」というブランドを作り上げたといえるだろう。

* ジャン・コクトー「マリー・ローランサン」1918年頃(『ポエジー(1917-1920)』1920年刊行) 堀口大学訳(『コクトー詩集』1954年、新潮社)では「野獣派(フォーヴ)と立体派(キュビスト)の間で小さな牝鹿よ あなたは罠にかかった。」



マリー・ローランサン《少女とエアデルテリア》1937年 油彩・カンヴァス 55.0×46.5cm



参考写真: 絵画教室のローランサンと愛犬ディナ 1934年頃

休館中の活動

学校・幼稚園・保育園・公民館の皆様 出張授業を利用しませんか？

館では、スタッフが出向いて鑑賞授業のお手伝いをする「出張授業」を実施しています。作品の見方を深めるアートカードゲームや複製画ポスターを使って話しながら作品を鑑賞する対話型鑑賞など、先生方のご希望やご相談に応じて行っています。

工事休館中は学校だけでなく、幼稚園や保育園、公民館等からのお申し込みも大歓迎です。

派遣費用は必要ありません。ぜひ出張授業を利用してみませんか？まずは、下記までお電話でお問い合わせください。お待ちしております。

問い合わせ先：群馬県立近代美術館 教育普及係 Tel. 027-346-5560



アートカードを用いて作品の見方を深めるゲーム



各グループにスタッフがついて一緒に話をしながら作品を見る対話型鑑賞

